

保育学生の継続的なボランティア体験による 学習効果と低下要因

西 川 ひろ子

Learning Effects and Factors of Decline due to the Continuous Volunteer
Experience of Childcare Students

Hiroko NISHIKAWA

児童教育学科, 教育学部,
安田女子大学

要 旨

ボランティアによる学習効果は多くの研究から検証されているが、その効果の個人差は大きいことを教員養成校教師として実感していた。そこで、教員養成系大学での学びと関連しやすい教育現場でのボランティア経験を分析対象とし、どのような学習効果があったのか。学習効果の個人差が生まれる阻害要因は何であったのかをアンケート及び聞き取り調査によって分析した。最も顕著な学習効果は適性の確認や将来の教育者としてのイメージの構築であった。また、継続的なボランティア経験は、大学での学びとボランティア先での経験を往還的に学習できることで学習効果を高め、大学での学習意欲も向上させていた。一方、学習効果の阻害要因は、ボランティアを行う学生側が習得している知識・技術・経験では、対応できない依頼を受けて失敗した体験やその逆に容易過ぎる依頼内容であり、自己の力不足感や物足りなさを感じた場合に教育効果が低いことが明らかとなった。

キーワード：ボランティア、学習効果、阻害要因

1. 研究の目的

本研究は、10年間継続して実施してきた公立幼稚園と大学と教育委員会が連携した学生ボランティア活動の学習効果の検証である。

保育士資格や教員免許状を取得するための幼稚園・保育所・施設での実習は、保育者や子どもを理解し、保育施設の機能や役割を学ぶ上では不可欠である。更に、自分自身の保育者としての適性があるかどうかを考えさせられる機会にもなっている。家田ら(2016)は、「教育実習に総合評価(全体として)と教職への意欲および教職への適性との関連を調べたところ、いずれに關しても、教職への意欲が強い者及び教職への適性があるとするの方がやや肯定的な評価をしてい¹⁾」と指摘しており、実習と教職への意欲と適性との関連性の深さを指摘している。しか

し、実習は長期間であっても二ヶ月以上のものは無い。数ヶ月後に実習先に何うと子ども達の成長に驚くことはよくある。また実習準備や教職意欲を向上させる前段階にボランティアを推奨している養成校も多い。申崎ら(2017)は、実習前の1年時より子育て支援イベントボランティアに継続的に参加させた成果について、「初年次の学生にとっては、子育て支援や保育技術について学ぶだけでなく、他の授業の理解を促進する、インターンシップや保育実習に臨む際の技術的な基盤や心理的支えとなる、自分の適性を知り進路を決定する手がかりとなるなどの意義があることが示された」²⁾と記している。実習の効果を促進するのがボランティアであることは多くの論文で明らかとなっている。しかしその一方で、ボランティアの学習効果には参加時間によって差が見られることを溝部ら(2014)らは、「学校支援ボランティア活動の効果的な活動時間として、少なくとも週1回程度の頻度で1セメスター期間継続することが一つの目途となるであろう」³⁾と指摘している。更に溝部ら(2014)らは、「学校支援ボランティア活動の中で学生は多くの困難を経験していた」⁴⁾とも記している。更に、申崎ら(2017)は、「しかし、特に1年生の場合は、子どもに対する知識やふれあいの経験が浅いため、活動の中で困難を強く感じる場面もみられる」⁵⁾と問題点を挙げている。溝部ら(2014)の研究は、小学校や中学校の学校支援ボランティアに参加した大学生を対象にしたものであり、溝部ら(2014)は、保育を学ぶ学生を対象としているがボランティア活動先が子育て支援関連のものであり、保育所や幼稚園へのボランティアを対象とはしていない。保育士の離職率が問題視されている現在、保育所や幼稚園での継続的なボランティア活動を経験することは大きな教育効果が期待される。

そこで、広島市教育委員会と連携した幼稚園への学校等支援活動を研究対象とした。本活動には、平成21(2009)年より10年間、調査対象の大学の在學生は参加してきた。学校支援活動とは、広島市内の大学と広島市教育委員会とが連携して行う長期間のボランティア活動のことである。具体的には、広島市内の保育士・教職を目指す学生が年間を通して学校及び幼稚園の担任の補助・作業等を週1回程度行う。通常の学校へのボランティアとの違いは、「大学での事前指導や報告書の提出」と「体験活動報告会などの事後指導」といった事前事後指導が充実していることである。

筆者は、平成21(2009)年より幼稚園における学校等支援活動の事前事後指導を担当してきた。平成21(2009)年には、88名の学生が参加し、翌年以降は61名、114名、66名、65名、21名、87名、62名、69名、72名が参加し、今年度(2019)は、56名が参加している。11年間の累計は、761名で、平均は69.18人であった。つまり、調査対象の大学の学生は毎年ほぼ70名が広島市内の公立幼稚園へ年間ボランティアに参加している。しかし、その学習効果と課題を客観的に分析しているとは言えない。溝部ら(2014)が指摘している学生が直面している課題とは何か。将来の教職意欲と密接に関連するボランティア活動の課題を明らかにすべきであろう。

そこで、本研究の目的は、長期間の幼稚園へのボランティア体験を通して、学生の保育における資質の変化などの学習効果を分析するとともに、その効果を低下させる要因を明らかにすることである。

2. 研究の方法

① 研究方法の視点と三つの調査

本研究の方法は三つの視点より進める。第一は、ボランティア参加動機及び目的、第二はボラ

ンティアでの学習内容と課題、第三は、ボランティアの学習効果を高める要因と阻害因子の分析である。そのため、それぞれの視点に対応した三つの研究方法を行った。つまり第一の調査により、学校支援活動の事前指導に参加した学生にアンケートを実施し、学校等支援活動に参加した動機や目的を明らかにした。第二の調査では、学校等支援活動の参加期間中に活動先の幼稚園別に学校等支援活動に参加して学んだこと、課題と思っていることなどをミーティング形式で聞き取り調査を行った。第三の調査では、学校等支援活動参加後に学びが大きかったと回答したグループとそうではなかったと回答した学生を二グループに分け、それぞれの活動内容と学びの質が変化した要因を分析した。

② 研究方法の概要

(1) 学校等支援活動参加前における参加動機などに関する事前アンケート調査

調査対象：学校等支援活動事前説明会に参加した 大学1年～3年 246人

調査期間：平成26（2014）年1月 回収率100%

調査項目：9項目

問1 学校等支援活動に参加を希望する理由

問2 学校等支援活動に参加した経験あるいは参加した年度

問3 学校等支援活動で学びたいこと

問4 学校等支援活動に参加する際に、不安なこと

問5 学校等支援活動の今回の説明会で最も印象に残ったもの、参考となった内容

問6 学校等支援活動で一番学びとなったり、参加して良かったりしたこと（経験者対象）

問7 学校等支援活動で困った経験や失敗した経験（経験者対象）

問8 学校等支援活動を行う際に、大学でサポートしてほしいこと

問9 学校等支援活動を行う際の、学校・幼稚園側への要望

(2) 公立幼稚園への学校等支援活動における学習内容と課題に関する聞き取り調査

調査対象：広島市立幼稚園への学校等支援活動参加者 大学2年～4年 61名

調査期間：平成26（2014）年9月～10月

調査項目：4項目

問1 学校等支援活動の活動内容

問2 学校等支援活動に参加したことで大学の勉強や実習などで役に立ったこと

問3 学校等支援活動で成長したこと、学んだこと

問4 学校等支援活動で困ったこと

(3) 公立幼稚園への学校支援活動における教育効果の要因に関するアンケート調査

調査対象：公立幼稚園への学校等支援活動参加者の大学4年生21人

調査期間：平成31（2019）年2月 回収率 75%

調査項目

問1 何年間、学校等支援活動に参加しましたか

問2 年間を通して学校等支援活動に参加することで習得したことはありましたか

問3 問2で“①あった”と答えた方にお聞きします。どんなことを習得できたと感じましたか

問4 年間を通して学校等支援活動に参加することで子どもの成長や変化は見られましたか

問5 問4で“①よく見られた、②やや見られた”と答えた方にお聞きします。具体的な場面を教えてください

- 問6 活動の中で、“気になる子ども”に出会うことができましたか
- 問7 問6で“①あった”と答えた方にお聞きします。活動を通して、“気になる子ども”に対する保育者の支援を学ぶことができましたか
- 問8 問6で“①あった”と答えた方にお聞きします。活動の中で、“気になる子ども”に対して自分なりの支援を行うことができましたか
- 問9 活動の中で子ども同士のいざこざや葛藤場面を見ることができましたか
- 問10 問活動の中の子ども同士のいざこざや葛藤場面を通して、対応する力を身に付けることができたと思いますか
- 問11 季節を感じる保育を知ることができましたか
- 問12 問11で“①大変できた ②まあまあできた”と答えた方にお聞きします。季節を感じる具体的な場面を教えてください
- 問13 活動の中で保護者の方と関わったり、保育者と保護者との関わりを見たりして、保護者との関わりについて学んだことがあれば教えてください
- 問14 活動の中で保育者と連携したり、保育者同士の連携を見たりして、保育者間の連携について学ぶことができましたか
- 問15 活動を通して、保育者の声かけの意図や配慮を推測できるようになりましたか
- 問16 活動の中で、自分が子どもたちの前に立ち、保育を行う場面がありましたか
- 問17 問16で“①よくあった ②時々あった”と答えた方にお聞きします。子どもの前で保育を行って身についたと思う力を教えてください
- 問18 学校等支援活動で学んだことを実習で活かすことができましたか
- 問19 問18で“①大変できた ②ややできた”と答えた方にお聞きします。具体的に活かすことができた場面を教えてください
- 問20 学校等支援活動を通して自身の保育者の適正があると感じましたか
- 問21 学校等支援活動を通して将来の保育者像をイメージすることができましたか

3. 研究の結果

(1) 学校等支援活動参加前における参加動機などに関する調査結果

表1に示したように事前指導である学校等支援活動事前説明会に参加した7学科の学生の合計は264名であったことに対して、児童教育学科では204名の参加者があり、教育系の学部の学生が学校及び幼稚園へボランティア活動に高い意欲を持っていることが伺える。

表1 学校等支援活動事前説明会に参加した学生数

	書道学科	日本文学科	英語英米文学科	児童教育学科	生活デザイン学科	管理栄養学科	心理学科	合計
1年生	0	22	5	108	5	3	3	146
2年生	1	10	0	38	0	0	2	51
3年生	0	4	5	58	0	0	0	67
合計	1	36	10	204	5	3	5	264

「問1 学校等支援活動に参加を希望する理由」に対する回答は、「教員になることを目標としているため、実際の学校現場に長期間携わりたい」「教職を目指しているから」「実習以外で学校に関わりたい」「活動に関心があったため」「現場を知りたい」「教師の仕事を知りたい」とあり、全ての回答が教職への高い関心であった。教職への高い意欲を示す一方で、「問4 学校等支援活動に参加する際に、不安なこと」の回答結果では、ボランティアの参加が初めての一年生と上級生とは違いがあった。具体的には、表2に示した通り、一年生は「知らないことへの不安」、上級生は「学業との両立や活動内容に不安」を持っていたが上級生の方が不安項目は少なくなっていた。この背景には、上級生は、学びたい内容や意図が明確になっており、他のボランティアや実習経験によってボランティア活動内容に見通しを持てることが推測できる。

表2 学校等支援活動に参加する際に不安なこと

一年生の不安	上級生の不安
面接の内容、未熟な自分が活動に参加してうまくやれるのかどうか、学校や幼稚園についての知識が少ない、自分の性格で緊張してしまい、人見知りの性格、職場の雰囲気、体調不良の際の対処、学業との両立をしながら最後まで続けられるかどうか、生徒とのかかわり、活動内容。	学業との両立、日程、役に立つか、行きたい所の募集があるか。

(2) 広島市立幼稚園への学校等支援活動参加者への聞き取り調査結果

幼稚園への学校等支援活動の活動内容は、表3に示したように行事関連活動の補助、環境構成及び教材準備が主であり、幼児と直接かかわる保育活動を分析すると、通常のクラス活動に参加している幼児とのかかわりと、それらの活動や行事に参加しにくい幼児とのかかわりに区分できた。

表3 学校等支援活動の活動内容

行事関連活動の補助		運動会の手伝い（子どもが衣装に着替える時の手伝い、小道具の運搬や設置） 生活発表会やカレーパーティの手伝い（小道具の運搬や設置、子どもが野菜を切るときの補助や調理の手伝い） 体力測定の手伝い
環境構成及び教材準備		環境整備（草抜きなど、遊具などの移動、絵本の整備） 壁面や小物づくり、看板の色ぬり
保育活動	通常クラス活動の幼児とのかかわり	絵本の読み聞かせ 子どもと遊ぶ リズム体操を子どもと一緒にやる
	クラス活動に参加しにくい幼児とのかかわり	運動会や発表会の時の障害がる子どもを見ておくこと プールに入れられない子どもの相手 参観日の時や卒園式の時の未就園児の子ども子守り

さらに「問3 学校等支援活動で成長したこと、学んだこと」の回答では、表4に示したように年間を通じた保育行事の見通しや子どもの発達について学んでおり、三年目の学生は園外活動や地域との連携まで学ぶ機会を得ていた。ボランティアに継続して参加することによる学び場の拡大が推測できる。

表4 学校等支援活動で成長したこと、学んだこと

	1年目	2年目	3年目
行事関連活動	年間を通しての園の生活、流れを知ることができた		行事を見越した準備を学べた 園外保育の際の配慮の大切さを学んだ
環境構成及び教材準備	制作物のバリエーションが増えた。技術を学んだ。		
保育活動	先生の保育を見て子どもたちとの関わり方を学んだ(例:落ち着きがない子どもに今、すべきことを考えられるような声掛け) 子どもの成長に合わせての関わり方を学んだ	年少から年長まで見ることができるため、子どもの成長の過程を知ることができた。 先生同士の関わりを見ることができた 昨年とは違う園に行くことで、他園との共通点や異なる点を知ることができた。	子どもの3年間の成長を見ることができた。 地域との連携を少し知ることができた。

また、「問4 学校等支援活動で困ったことは何ですか」との回答は、経験年数には関係なく、「作業があまりない場面（朝の掃除）学生が多いため、作業がすぐ終わってしまいその後の時間することがない」、「朝、掃除の後子どもが来るまでの時間にすることがなく暇」、「子どもの試し行動に対しての関わり方」があがった。活動内容があまりない状況と子どもの問題行動への対応に苦慮していることが明らかとなった。大学と幼稚園との連携や参加学生の配当人数の調整や参加日の工夫などの対応が必要であった。更に、子どもの問題行動への対応について事前学習の不足も課題であった。

(3) 公立幼稚園への学校支援活動における教育効果の要因に関するアンケート調査結果

まず、「問2 年間を通して学校等支援活動に参加することで習得したことはありましたか」の問いに「あった」と回答をしたのを高群、「なかった」との回答を低群に区分した結果が図1である。高群が52%、低群が48%との結果であり、予想以上に学校等支援活動の学習効果を実感していない学生が多い結果となった。

学習効果が高かった高群と、低かった低群に分かれた要因を分析するために他の調査結果はこの二者間の比較検討をおこなった。

年間を通して学校等支援活動に参加することで習得したことはありましたか



図1 年間を通して学校等支援活動による学習効果の実感

次に参加経験年数を比較した「問1 何年間、学校等支援活動に参加しましたか」の結果は図2に示したように、低群の80%は初めて参加した学生であったことに対して、学校等支援活動に三年間参加した学生の全てが高群であった。このことにより、初めての年に学校等支援活動の内容に不満を感じ、自分の力不足の経験をしたとしても、翌年も継続的に活動に参加を行うことによって高い学習効果が得られていることが推測できた。

次に学習効果を実感した内容の分析結果を図3に示した。「問3 問2で“①あった”と答えた方にお聞きます。どんなことを習得できたと感じましたか」との問いに対して、高群は「言葉かけの仕方」「気になる子どもへの支援」「環境構成の配慮」「保育者の連携」「行事を通した子供の成長」の全ての項目で高い結果となっていることに対して、低群は全ての項目で学習効果を実感できていないという深刻な状況となった。

次に調査結果(2)で明らかとなった障害がある子どもとのかかわりに関する項目について分析した。「問6 活動の中で、“気になる子ども”に出会うことができましたか」との問いに対しての回答を図4に示した。

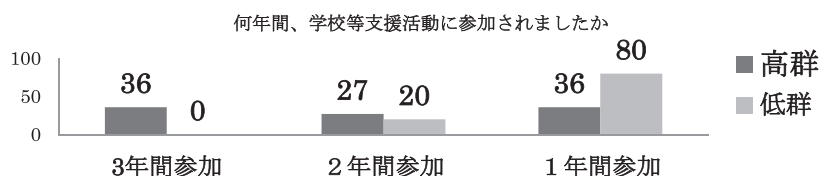


図2 学校等支援活動参加経験年数

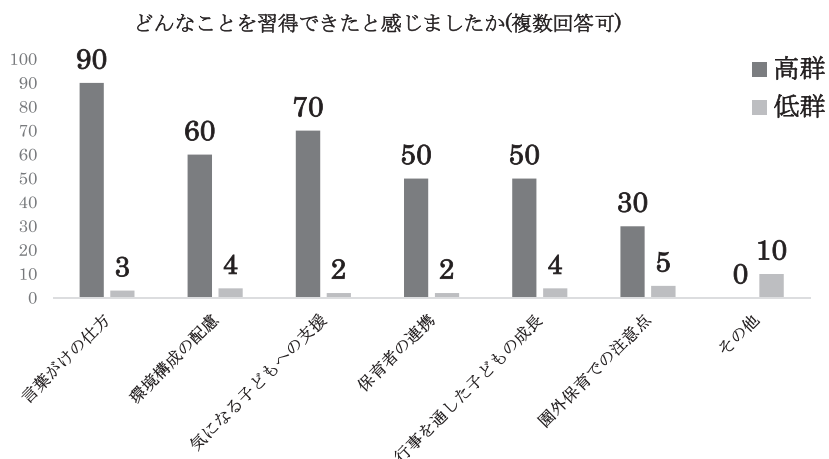


図3 学習効果を実感した内容

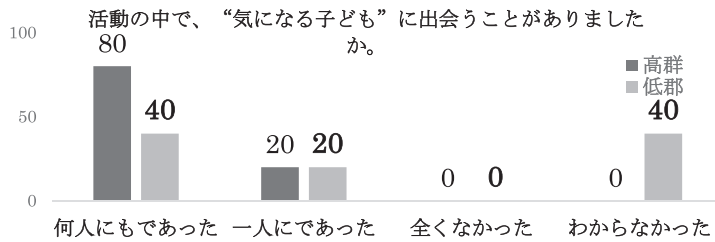


図4 気になる子どもとのかかわり経験

この結果の課題は、低群では、気になる子どもであるかどうか「わからなかった」との回答が40%であることである。子どもとのかかわりの不足のためなのか、高群と大学で同じ学びをし、同じ公立幼稚園にボランティア参加しているにもかかわらず子どもの発達を考察する視点の不足が推測できる。更に、「問6で①あった」と答えた方にお聞きします。活動の中で、“気になる子ども”に対して自分なりの支援を行うことができましたか」の結果を図5に示した。高群の方が気になる子どもへのかかわりの自己評価が高く、70%が「まあまあできた」と回答していることに対して、低群は、「できなかった」「あまりできなかった」と回答の割合が66.7%と明らかな差が出ている。

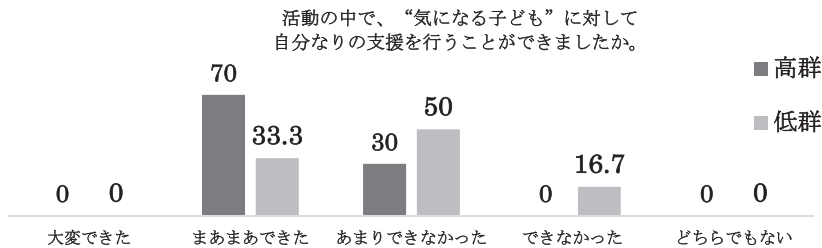
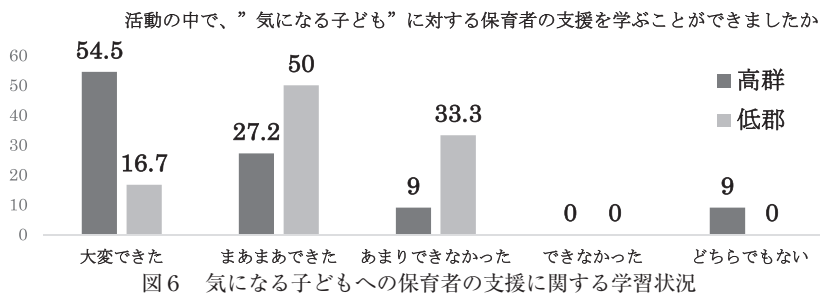


図5 気になる子どもとのかかわりの自己評価

気になる子どもとのかかわり方のモデルとなる担任保育士からの学びについて分析した。「問7 問6で①あった」と答えた方にお聞きします。活動を通して、“気になる子ども”に対する保育者の支援を学ぶことができましたか」との回答結果を図6に示した。この結果も高群と低群では、保育者から気になる子どもの支援を「大変できた」と回答した高群が54.5%、低群では、16.7%であった。一方、「あまりできなかった」との回答した高群は9%、低群では33.3%と大きな差があった。このことから、高群の学びの一つに気になる子どもの保育者の支援が関係しているのではないかと考える。逆に気になる子どもの支援を学ぶことができなかったことが、学校等支援活動全体での学びを感じられなかったことに関係しているのではないかと考えられる。更に、参加経験年数によって担任保育者とのかかわり方の相違が影響しているとも推測できる。



次に学生と担任保育者とのかかわりを「問15 活動を通して、保育者の声かけの意図や配慮を推測できるようになりましたか」を通して分析した。図7に学生の保育者の意図や配慮の理解をまとめた。保育者の意図を高群の方が低群よりも理解している傾向があった。しかし課題なのは、低群の20%が「ほとんどなかった」「未回答」を回答していることである。この結果からも学校等支援活動の学習効果の差は、保育者とのかかわりに影響を受けているのではないだろうか。

公立幼稚園へのボランティア経験と実習や教職への適性や将来像との関連についてを「問18 学校等支援活動で学んだことを実習で活かすことができましたか」と、「問20 学校等支援活動を通して自身の保育者の適正があると感じましたか」に示した。それぞれ図8と図9に結果をまとめた。図8に示したように高群では「大変できた」との回答が18.2%であることに対して低群は0%であった。逆に「全くできなかった」との回答は、高群が9%であることに対して、低群は40%と非常に高い。この要因は不明であるので今後の課題としたい。

更に、図9で示した保育者の適性への自覚に関しては、高群が「大変ある」「ある」「少しある」の合計の回答は81.5%、低群は50%であり、高群の方が教職へ自己の適性について高く評価していた。では、低群が自己の適性がないと判断したのかというところではなく、「わからない」との回答が40%と高かった。公立幼稚園へのボランティア活動の継続によってこれらの学生が自己の適性に対して自信を持てるようなサポートが必要であろう。

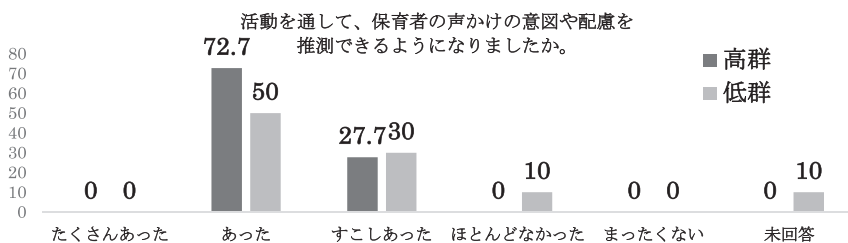


図7 学生の保育者の意図や配慮の理解

学校等支援活動で学んだことを実習で活かすことができましたか

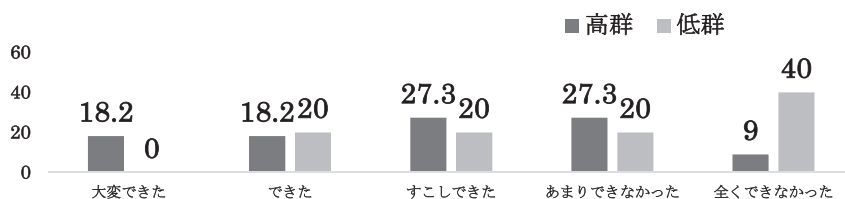


図8 学校等支援活動と実習との関連

学校等支援活動を通じて自身の保育者の適性があると感じましたか

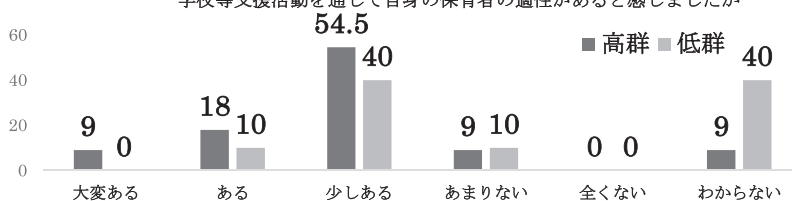


図9 学校等支援活動を通じた保育者の適性の自覚

4. 考察及び今後の課題

本研究を通して以下の七点が明らかとなり、長期間の公立幼稚園へのボランティアによる学習効果にはいくつかの要因が影響していることが明らかとなった。

一点目は、長期間の公立幼稚園へのボランティア活動を通して学習効果が高かった学生とそうではなかった学生の割合はほぼ半数に分かれ、先行研究が指摘していた週一回のボランティア参加だけでは高い学びを得ることが難しいことが明らかとなった。二点目は、学習効果が高かった学生は、継続的に数年間にわたって参加していた。三点目は、参加継続年数が長くなると、行事準備や環境構成・教材作成の他に保育者とのかかわり、園外活動や地域の方とのかかわり経験が増加などの活動内容が拡大していった。四点目は、特に学習効果が高かった学生は、保育者の意図を理解できるように成長していた。五点目は、学習効果が低いと感じている学生は気になる子どもとの対応が上手くいかない経験が多く、担当保育者から障害がある子どもへの支援について十分に学んでいないと感じていた。六点目は、学習効果が高かったと感じている学生は、ボランティア経験を実習準備にもつなげていた。七点目は、学習効果が高かったと感じている学生は、自分の保育者としての適性について高い自己評価を得ることができた。

また、課題は、次の三点である。一点目は、ボランティアの事前指導にて継続的に参加することで障害がある子どもへの支援の理解が深まり、保育者の保育の意図の理解がすすみ、地域との関わる経験が増えていき自分自身の保育者の適性の確認などの学習効果が高まることを十分に伝えておくことであった。実習ではないボランティア活動であっても事前指導の重要性が課題である。二点目は、気になる子どもへの対応や支援方法を事前学習することである。子どもへの理解不足によって学習効果を低下させてしまう要因となっていた。三点目は、担任保育者とのかかわりである。初めて参加した年は教材準備や環境構成といった作業が多い。この場合、担任保育者

へ積極的に作業の意義づけやどのように保育場面で使われるなどの質問をすることが自分の成長につながることを伝えておくことが課題であった。

引用文献

1. 家田重晴, 空子耕一, 小磯 透, 柿山哲治, 勝亦紘一. (2016) 教育実習指導の評価および教職への意欲と適性の自己評価に関する経年変化—体育学部・スポーツ科学部学生を対象として—. 中京大学体育学論叢, 57-1・2: 70.
2. 串崎幸代, 辻 ゆき子, 宮里慶子, 岸本みさ子. (2017) 保育者養成課程の初年次学生が子育て支援活動へ参加することの意義と課題—金蘭おやこクラブの教育効果に注目して—, 千里金蘭大学紀要, 14: 1.
3. 溝部ちづ子, 石井眞治, 齊藤正信, 財津信子, 道法亜梨沙, 酒井研作, 杉田郁代. (2014) 教員志望大学生の学校支援ボランティア活動の教育効果に関する研究 (2). 比治山大学紀要, 21: 41.
4. 前掲3): 41.
5. 前掲2): 10.

[2019. 9. 26 受理]

コントリビューター：山田 修三 教授 (児童教育学科)

